

# お家で できる 名品鑑賞

～その1～

体を使って《ミロのヴィーナス》を楽しもう

教育学部生涯学習学科 准教授

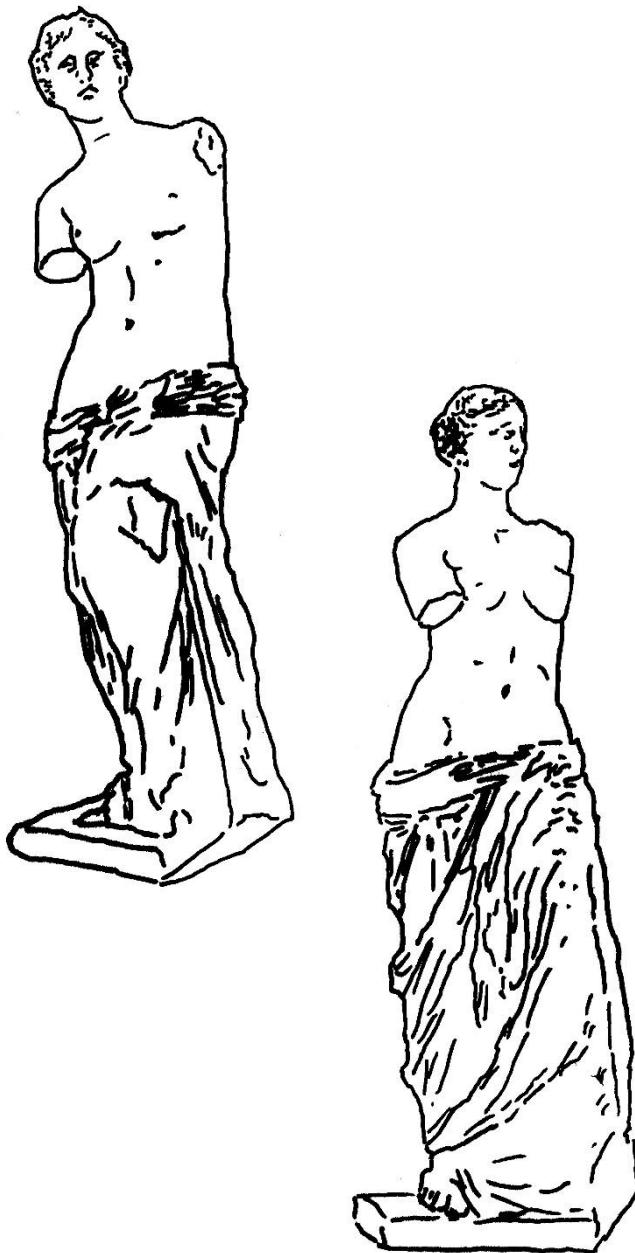
常葉ギャラリー 館長

堀切正人



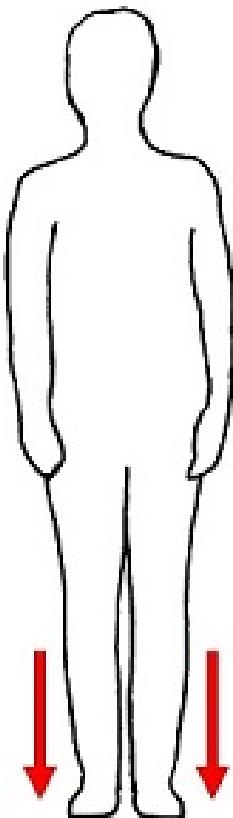
常葉大学

常葉大学短期大学部



誰もが知っている、ミロのヴィーナスです。ギリシャ彫刻と言えば、この作品ですね。美の女神を表した彫刻ですので、美の代名詞、美しいものの規準のように思われています。

では、なにがそんなに美しいのでしょうか。よく言われているのが、理想的なプロポーションということです。八頭身だとか、黄金比が用いられているなどとも言われています。でもそれだけではないのです。この作品が優れているのは、理想的な体の比率が、流れるような動きのなかで実現されていることがあります。そのことを、みなさんの体を使って感じてみましょう。

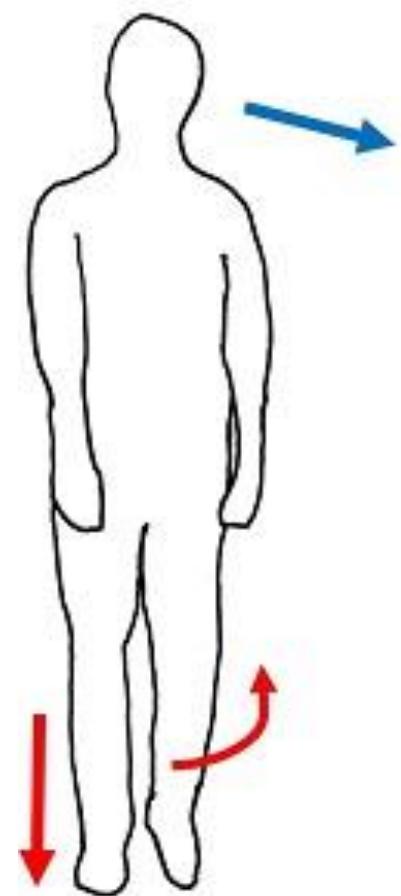


まずは、まっすぐ立ってみてください。

「気を付け」の姿勢ですね。両足のかかとをしっかり床につけて、両足に均等に体重をのせます。

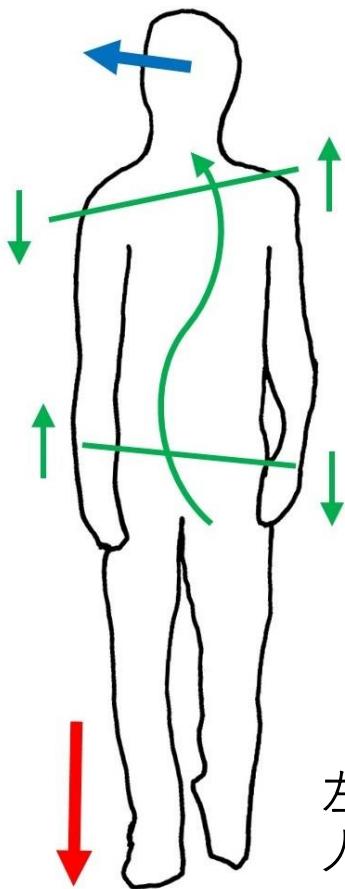
背筋を伸ばして、腰骨の上に背骨がのっているイメージを持ってください。この姿勢は安定してはいますが、動きはないです。

また長時間このままだと疲れます。そこで「休め」の姿勢にします。



みなさんの右足（図では向かって左）に体重をかけて、反対の足を床から浮かせます。

このままだと体は左側へ（図では向かって右へ）倒れてしまします。



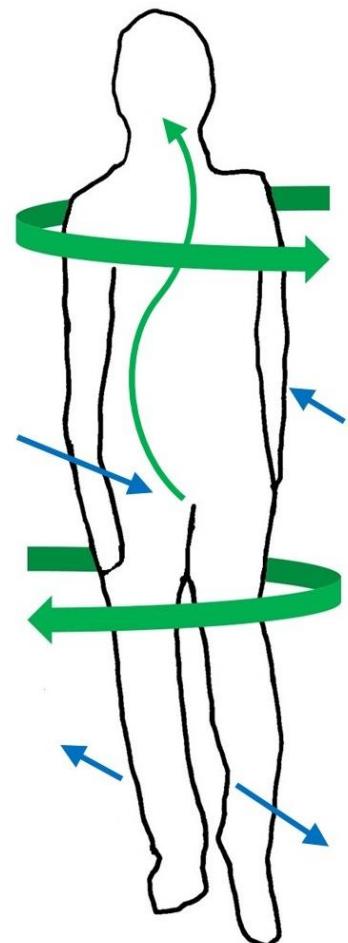
倒れないため、我々の体は自然にバランスを取るようにできています。まず体重をかけている右足の上の腰骨が上がり、反対側の腰骨が下がります。肩は右肩が下がり、左肩が上がります。それによって上半身は右側へ（図では向かって左へ）引き起こされます。このとき、背骨は微妙に左右に湾曲します。体の中心を通る線（体軸）が緩やかなS字曲線を描きます。

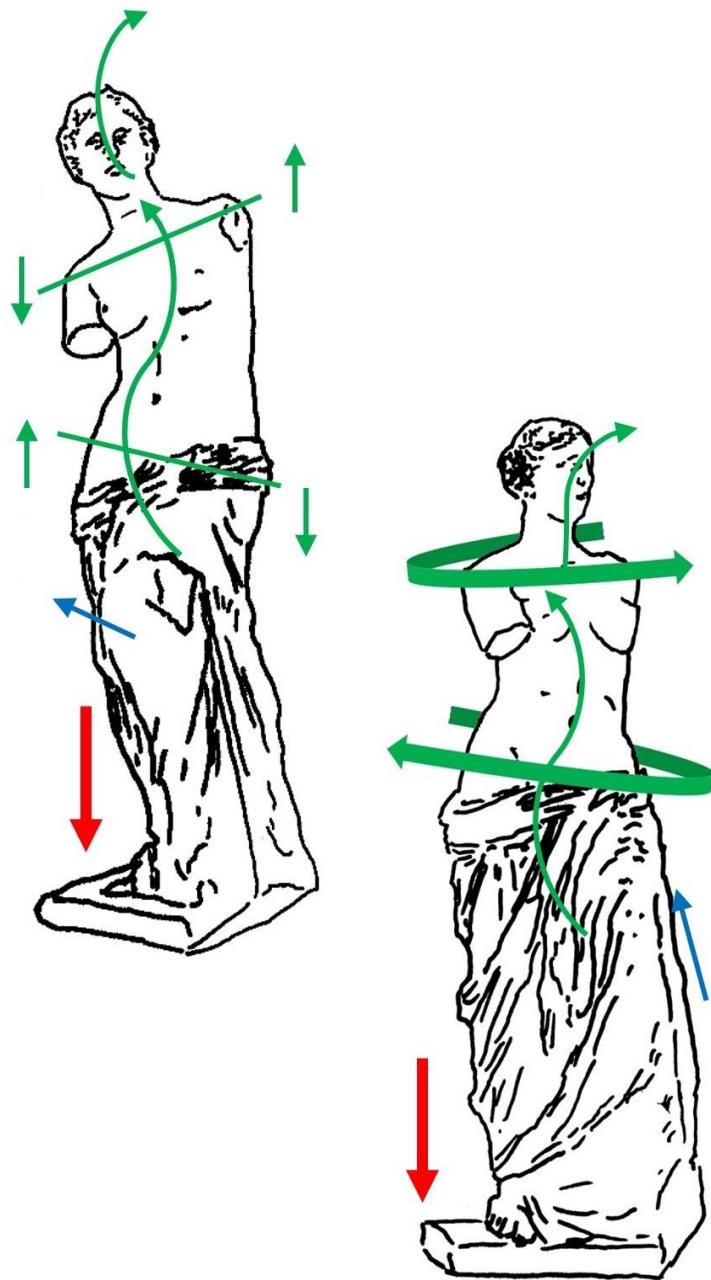
左足（図では向かって右）をさらに前に出してみましょう。人は歩くためには、どちらかの足に体重をのせて、反対側の足を前に出します。

普通、左足が前に出ると、自然と右肩と右手が前に出ます。左手は後ろに引きます（武術や古典芸能には、同じ側の手足を出す運足もあるそうですが）。

このとき、体をひねる動きが出てきます。

すると体軸には前後の動きが出てきます。S字曲線は、左右に加えて前後にも湾曲する、立体的な美しい螺旋曲線を描きます。





この状態から、左膝を上に引き上げて、左足を右足の上に置いてみましょう。右肩を少し下げつつ、ぐっと前に出し、肩と腰が90度近くなるぐらいまでひねります。顔は少し左上を向きます。  
すると、ミロのヴィーナスのできあがりです！

腕は失われてしまっているので想像するしかありませんが、右手は前に出つつ下に、左手は上がり気味だったようです。  
あとは、腰にバスタオルでも巻けば完璧です。

いかがでしょうか。うまくミロのヴィーナスをまねできたでしょうか。

我々の体が理想的なプロポーションかどうかはさておき（失礼）、この姿勢は人が二本の足で立って歩くために無意識に行っている、ごく普通の動きなのです。

どこかが上がれば、どこかが下がり、前後、左右、緊張と弛緩と、部分部分は相反する動きをしながらも、全体としては調和している。あらためて考えると、うまくできているものです。

ミロのヴィーナスが美しく感じる理由は、このような自然の理とも言える人の体の動きを、見える形で表していることがあります。

もっとも古代ギリシャ彫刻は、最初からこのような流れの美しい彫刻だったわけではありません。時代とともに、直立不動から、体重を片足にかけ、関節で曲げ、体をひねり、どんどん動きを表していきます。ミロのヴィーナスは、その古代ギリシャ時代末期の作品です。進化し続けた人体表現の到達点を示す代表例なのです。

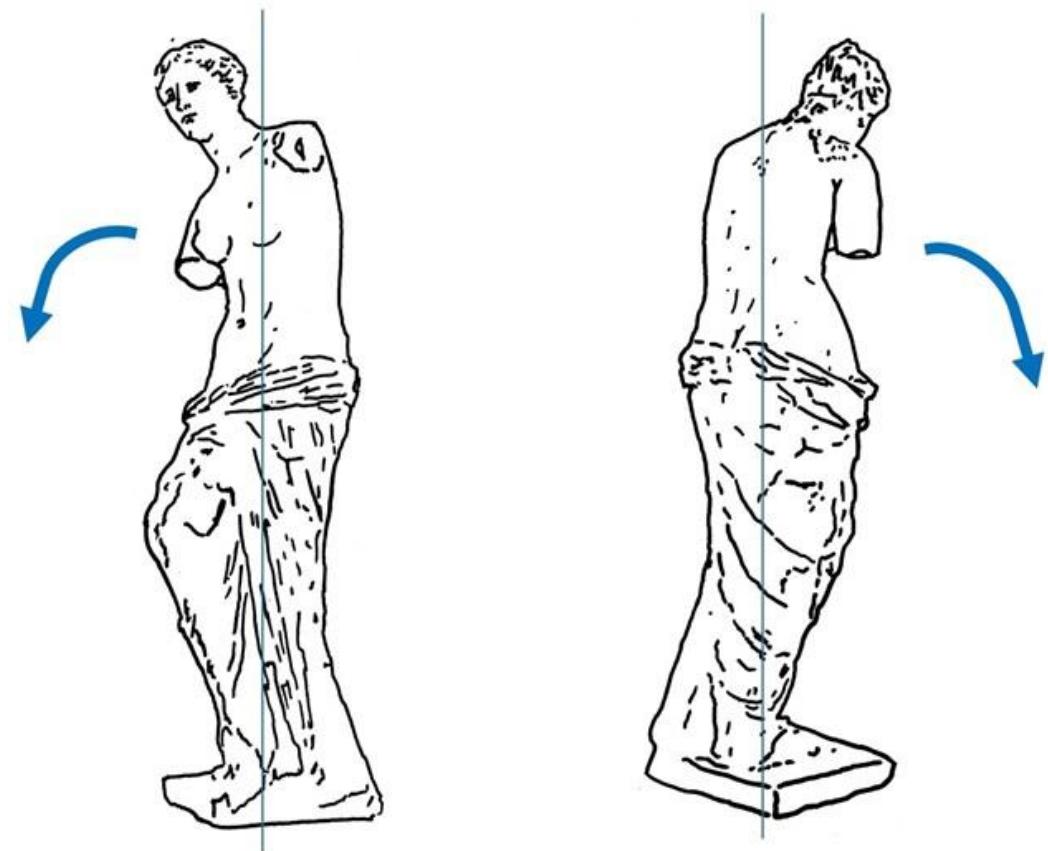
なおこのような体の表現の仕方を、コントラポスト（Contrapposto）と言います。

コントラポストは、その後、西欧社会に引き継がれて、人体表現の規範になります。

レオナルド・ダ・ヴィンチやミケランジェロも用い、現代でもファッションモデルの決めポーズや、マネキン人形に至るまで踏襲されています。

ところで、ミロのヴィーナスの写真は、顔の正面方向や、体の右側（鑑賞者側からすると向かって左側）方向から撮影したものが圧倒的に多いです。  
なぜでしょうか。

その理由は、ルーブル美術館に行って現物を見ると一目瞭然です。  
この彫刻は、体の右側（正面から見ると向かって左側）へ倒れそう  
なのです。見栄えがあまりよくないので、後ろ姿や、体の左側の  
角度から撮影した写真が少ないので。



この作品は、美の規範とされながら、実はとてもバランスの悪い彫刻なのです。左膝を高く上げ、体を右にひねる姿勢はかなりきつく、無理があります。いくらコントラポストが自然の理にかなっているといっても、上体をひねりすぎると、やはり足元はおぼつかなくなります。

古代ギリシャ彫刻の末期には、動きを求めるあまり、体をひねりすぎる作風のものが多くなります。そうなると彫刻は、もう自分の足では立てなくなります。高さが2メートルを超える大理石の像ですから、相当な重さがあります。それを細い足首で、しかも片足で支えるのは物理的にも無理なのです。そこで、さりげなく支柱代わりのモチーフ（物置台、柱、壺、腰にかけた布など）を付け足して接地面を増やし、なんとか立たせようとします。ミロのヴィーナスもその一つなのです。

古代ギリシャ文明、とりわけその彫刻の発達の歴史は、我々に進歩というものについて、考えさせてくれます。人は直立二足歩行をすることによって、進化を始めました。でも、二本足は不安定です。体をひねり、歩き続けなければ、倒れてしまいます。ですから人は歩みを進め、世界に広がり、文明を築き上げました。でも、ひねりすぎ、動きすぎると自立できなくなる・・・。この進歩の先には何が待っているのでしょうか。

コロナウィルス禍の今だからこそ、我々の社会や文明について考えてみるのも大切なかもしれません。ミロのヴィーナスをまねしながら、そうしたことに想いを馳せてみるのもまた良いでしょう。